

伊那郡産糸は概して好評で京都糸問屋仲間からは「御国糸の儀、桑蚕御土地に相応仕り候や糸性宜しく、当地に於いて御召御用織物を始め、撰糸羽二重類其の外の織物にも兼ね用い、上品の御産物に御座候云々」(戸島屋文書)といった評価を受けていた。この好評によりかかって品質低下を招いたこともあったが、安政期(二八五四)に入っても京都からの需要は衰えず、安政三年七月には京都の糸問屋日野屋から糸仲買商鱗屋へ糸荷の急催促があり、別けても「飯嶋辺且又葛嶋、大草細口もの、はる・夏とも宜しく候間、三口、四口位下ませにても御買い取り、御登せ下さるべく候」(『大沼日記』)とか、「随分夏子方評判宜しく候間、余慶に御願ひ申し上げ候、大草香坂夏子^(蚕)如何様とも成し下され、是非御買取り下さるべく云々」(同上)と述べて、評価の高さをうかがわせている。

養蚕農家と糸挽屋

天保四年における富屋藤七の春繭買付状況を見ると市域では、北下平村二軒・赤須町四軒・上赤須一軒・北原(上穂村)四軒・女体(同上)一軒・福岡(小町屋村)一軒などとなっており、北下平村がこの時期、養蚕の中心を成していたように思われる。市域外では大田切二・新田二(以上宮田村)、下牧二(伊那市)、田切二(飯島町)、滝あらい四(不明)、日曾利(軒数不明、飯島町)などが名前を現している(戸島屋文書)。

中沢郷でも近世後、末期にかけて盛んに養蚕が行われた。中沢郷は高遠領諸郷中最高の「蚕種運上」(錢一貫文余)を納めている(『長野県史』同上)。もってその盛況を知るべきであろう。また大曾倉村では安政元年に村内高持百姓の約半数に当たる一六軒が、年間に蚕種紙六七枚を掃立てしている(大曾倉志茂文書)。

一方、桑苗の植栽状況も養蚕の拡大を語っている。高遠藩では産物会所を通じた殖産振興策の中で桑・うるしの植栽をすすめた。しかし、これは多く田畑の畦畔を利用した、いわゆるボタ桑である。一方、上穂町の増屋嘉

蔵は弘化・嘉永期に桑苗四〇〇本（弘化二年）・同二〇〇本（同二年）・同六〇〇本（嘉永元年）と、ほとんど連年のように数百本単位の植栽をした（『大沼日記』）。既にボタ桑の域を脱して桑園造成以外の何物でもなかった。

こんな中で養蚕技術も進歩し、天保期には夏蚕も広がった。『大沼日記』にも「当所夏蚕流行」（天保十年）の記事が見られるが、その夏蚕糸が京都で意外な高評価を受けたことは前述のとおりである。

製糸は、もちろん手挽きであった。糸挽屋は繭買人とはほぼ重なり合うが、上穂町の者が多かった。増屋嘉蔵は弘化二年に春蚕の仕入繭八八貫余から糸一箇（ただし九貫目）を、また自家生産の夏蚕繭四貫七〇〇匁と仕入繭九〇貫程から糸二六把（八貫六〇〇匁）を生産している。

概して好評を得ていた伊那郡蚕糸であったが、弘化三年には京都の糸問屋日野屋外五人連署で、当地の糸仲買人・製糸業者を代表する富屋藤吉に宛てて、近年の品質低下に注意が喚起され、このまま推移するなら奥州仙台糸・二本松糸に遅れを取るであろうと指摘している（戸島屋文書）。蚕糸業勃興の中で、次第に産地間競争が激しくなっていることを語るものであろう。注意事項は以下の五項である。

- 一 繭五箇ないし六箇挽きにして糸の太さを揃えること
- 一 糸の落口を補う際に三箇も四箇も一度に付けないこと（小節ができて糸質が落ちる）
- 一 粹糸の糸口は必ず一口に限ること（二筋立てのものを合せ糸と言ひ半値にもならない）
- 一 把造りの際は品質を吟味して、良品・悪品を混合しないこと
- 一 一把三二〇匁を基準に糸の太さを一定にすること

糸挽きの労賃は繭五升を基準にした能率給で、天保十四年現在、銭二四文が相場であった。その後、製糸業の